
団樂の中で

森野涼子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

団欒の中で

【Nコード】

N34850

【作者名】

森野涼子

【あらすじ】

めでたく結婚した大神涼子と森野亮士。

そんな彼らと、御伽銀行の面々や御伽学園の生徒たちが送る、ほのぼのストーリー。

プロローグ～あらすじ～（前書き）

この物語のあらすじです。

あと、注意事項とともありますので、ここは忘れずお立ち寄りください。

プロローグ―あらすじ―

ずっと短編ばかりを書いていたので、今回からは長編を書いていこうと思います。

原作のアフターストーリー的な感じの、涼子×亮士で行こうと思います。

設定上は結婚しています。

でも、まだまだ二人は奥手なので子供はいませ（ry

そんな中で、御伽銀行の面々を合わせて書いていこうと思いますので。

原作を大切にしたい方は、お立ち去りください。

それでもいい方は、次からどうぞ♪

森野家が送る、面白おかしく書かせていただきます。

プロローグ～あらすじ～（後書き）

今後ともども、よろしく願いたします。

ある日の日常（前書き）

題名の…まんまです。

森野家のある日の出来事です^^

くどいようですが子供は（）ry

それではどうぞ。

ある日の日常

「りょうし〜!」

ここはとある住宅街の中のとある家の朝。

どこかで女性が朝食を作り終え、ある部屋へとまっしぐら。

「んん…」

その部屋の主の男性は女性の声に目覚めた模様。

しかしまだまだ寝ぼけているらしい。

「りょうし〜!」

「うわぁ!」

そんな事を言っている間に、女性が男性にタツクルをお見舞い。

「り、涼子…」

そろそろその起こし方は…やめないか…?」

「やだっ!」

先ほどから端末的な発言ばかりをするのが大神涼子、というのは旧姓で今は森野涼子さんとなっている。

そしてご察しできると思うが、男らしい口調なのが森野亮士君。涼子さんの前だけは男らしくできるようになった。

これまたご察しできると思うが、この御二人は今年の春に籍を入れてめでたく結婚、現在は同居している。

「そ、それじゃあどうしたらいいんだよ…」

ちなみにこの起こし方は同居当初から変わっていない。

目覚めはいいのだが、いつも歯切れ悪そうにしているが、涼子さんはやめる気配なし。

相当困った亮士君、とりあえず当たり前のことを聞いてみる。

「それじゃあ…ん！」

涼子さん、小さな唇を亮士君の前に突き出して待ってます。

これはどれだけ鈍感な人でも分かるでしょう。

「…それしたらもうやらないか？」

「うん！」

「ったく…」

子供のような涼子さんに負けたのか亮士君、ギュッと涼子さんを抱きかかえてキスをしました。

ただのキスじゃないです。朝から深いです。

「んん?!」

これには涼子さんもびっくり、目が点状態です。まあやってしまったもの勝ちでしょう。

「…これでいい…か？」

長々としたキスを終えた亮士君達、少し息が荒いです。

「朝からそれは…ないよ…」

「涼子の顔を見たらこうしたくなっただな。」

朝から熱々のお二人ですが、そんな状態では朝食が冷めますよ？

「「あつ！」」

すっかり忘れていた二人、急いで食卓へと向かいます。

その時にずっと手を繋いでいたことはつけ足しておきましょうか。

「うまいか？」

森野家に並ぶ豪華な朝食達。これをまずいという奴が見てみたいものです。

「何当たり前なこと言っただ。」

美味いに決まってるだろ？」

「ありがとなっ！」

なんて熱々なお二人でしょう。

お二人の空間だけ別世界が広がってますよ。

「そっいえば亮士、今日はどうするんだ？」

「今日は…特にないから涼子と二人きりだ。」

「やった！」

亮士君は今、御伽学園で教師をやってます。

御伽銀行の上司の理事長、荒神乱舞さんへのお願いの一つにしたら
しいです。

そして今日は休み、涼子さんと二人きりです。

これには涼子さんも嬉しそうにします。

おっと、そういえば言い忘れていましたが、涼子さんがあんなに素
直になっているのにはたくさんのがあつたのですが…
それはまた違う所で。

そんなこんなで甘々な森野家の朝。

あれが昼も夜も続いたため、ナレーター兼作者の主は耐え切れないた
め、はしよらせていただきます

そんなこんなで続く森野家。

これにりんごさんや乙姫さんなどが入ります♪

はてさてどうなるのか…？

ほのぼの騒がしい森野家とその周りのお話。

ある日の日常（後書き）

どうでしたか？

何かありましたら感想等をお願いします。

第一話（前書き）

今後のサブタイトルはこのように感じて書かせていただきます。
感想の方もいただいたので、頑張つて書いていきたいと思ひます！

あ、言い忘れていましたが、これからりんごさん達がでると同時に、オリジナルキャラクターも出るのであしからず。

ちゃんとプロフィールとかも書きますので、心配しないで大丈夫です。

第一話

「亮士、どこにいくんだ？」

涼子さんと亮士君。二人は今、とある道を歩いています。どうやら亮士君が今日の休日権を得たようです。

「ん？どこだろうな？」

そして例にもよって、亮士君は涼子さんに教えようとはしていません。

「教えてくれたっていいだろ！」

「教えたら面白くなるから、教えられない♪」

おやおや亮士君、なんだか上機嫌ですね。

朝からあの深いキスは、自分の中で勝ったと思ったのでしょうか？

「むっ……」

それを察したのか、涼子さんは何も言えない様子。

いつかのあの毛皮は、初対面の人にもすっかり見せなくなりました。四六時中、亮士君と一緒にいるせいかな、警戒をすることもなくなつたようです。

まあ、亮士君以外の男の人にはまだなれず、少しビクビクしているようには見えますが。

「大丈夫だよ。」

涼子の思うほど、今日会う相手は悪い奴じゃないからさ。」

「…今日はどんな相手なんだよ。」

「今日は一年生の軽いテストだよ。
今日の依頼だね。」

おっと、またまた言い忘れていましたが、亮士君は教師をやるのと同時に御伽銀行の顧問をやっていたりするのです。

頭取さんが亮士君直々に命名したそうです。
もちろん、乱舞さんも大歓迎。晴れて亮士君は教師兼御伽銀行顧問をやっているわけなのです。

「今日は赤井さんとかもいるみたいだから。」

「りんごがか？」

まさか今日の依頼って…」

「まあ、行ってみてからのお楽しみだよ。」

クスクスと笑いながら、亮士君は涼子さんの手を強くひいてます。
しっかりと握られた手、そこから伝わる二人のぬくもり。

「あ、待って！」

そのぬくもりを離すものかと涼子さん、またギュツと手を握り返します。

なんともまあ、ほほえましい姿といつかなんといつか…

次へと進みます。

第一話（後書き）

…なんか中途半端になりましたネ。

スランプってことで片付けさせてもらえますか？

な、何か感想等がありましたらよろしくお願いします…

第二話（前書き）

だいぶ日にちがあいちゃいましたく>

最近、本当に頭がすっからかんで困ってますく>

頑張りますんで、温かい目で見てくださいね。

第二話

「到着つと…」

ここは涼子さんにとっては思い出の地、亮士君にとっては仕事場である御伽学園に到着です。

相も変わらず、どでかい学園です。

「あのプレハブ小屋？」

「そつ。」

依頼主と一年生が待つてゐたいだから、急ごうか。」

涼子さんの手をしっかりと握り、いつものボロプレハブ小屋へと向かう亮士君。

それにつられて涼子さんも離すまいと続きます。

「あ、先生じゃないですか！」

プレハブ小屋に入った途端、元気のいい声が飛び交ってきました。背が小さく、あの赤いゴスロリ衣装の少女を思わせるような容姿です。

「やあ、睦月。

如月と弥生は？」

「如月はいつもの所で寝てて、弥生は鳥と戯れています。」

彼の名前は睦月伸輝君。むつきのおひてる

学園中のアイドル的存在の、超有望な一年生。
とにかく元気がいいことで有名。

「しょうがないなあ、あいつらは…」

「そつえば先生、隣…というか後ろに隠れている人は…?」

睦月君が指した先には、若干…というかかなり震えている涼子さんの姿が。

先輩なのに、このおどおどさは昔の亮士君を彷彿とさせますね。

「彼女は僕の妻の涼子だよ。

昔に色々あつて、男の人が苦手だね。」

「先生は大丈夫なんですか?」

「僕はずっと一緒だからね。涼子もなれてくれるよ。」

ははっ、と笑う亮士君。

なんか、昔の面影とかゼロですね。普通に先生です。

「森野…涼子です…」

それに比べて涼子さん、嘘の毛皮を脱いじゃったせいか、気弱な面全開です。

こちらも昔の面影は全くないですね。

「睦月伸輝です！」

いつも先生にお世話になってます!」

それに比べて睦月君、元気ハキハキの万遍の笑顔ですね。

…ホントに赤い誰かさんを思い出させます。

でも、睦月君は純粹ですよ？あの赤い人とは違って…

「そろそろ名前を出してもよろしいんじゃないんですの？」

「り、りんご?!」

突如プレハブ小屋の扉が開き、現れた睦月君位の背丈の女の子。
これまたキュートで“見た目”だけはかわいい女の子が現れました。

依頼の内容とは？

そしてりんごさんはどう絡んでくる?!

第二話（後書き）

… またも中途半端です<>
なんか感想とかあったらコメください<>
よろしく願います<>

第三話（前書き）

今日は学校の振り替え休日で暇なので書きます^^

歌詞小説の方は随時募集中なので何かありましたらメッセージの方、お願いします♪

それでは、駄文のお付き合い願います^^

第三話

「今日の依頼主のご登場だね。
いらっしやい。」

亮士君がりんごさんのことをもてなすと、ボロボロの椅子へと誘います。

「地下本店じゃ駄目ですの？」

「あれは一応、御伽銀行のメンバー以外は入れないからね。
残念だけど、ここで我慢してくれないかな？」

「あのふかふかが恋しいですの〜…」

さすがりんごさん、いつもどおりな感じですね。
昔と全く変わらないがめつさ…

「何か言いました？」

いえ、なにも？

つというか地の文に突っ込まないでくださいね。

「それじゃあ睦月、今からテスト開始だ。」

「テスト？そんなの聞いた覚えはないんですけど…」

「それは依頼主には言う必要性がないからかな？」

「私達はやりましたっけ？」

「僕がここの教師を始めたくらいに始めたから、そこまで浸透はしてないよ。」

ま、経験者がいないとテストなんてできませんしね。

亮士君が入る前の御伽銀行のOB・OGはみんな他に行っちゃいましたしね。

「でも、如月たちは…」

「今から呼んでくるから、先にやってて。」

赤井さんもここの経験者だし、涼子だっているからさ。」

「分かりました！」

相変わらず元気のいい声ですね。

睦月君、りんごさんとは大違いで…

「うるさいですよ！」

…地の文にも突っ込まないですし。

そんなこんなで亮士君、残りの二人を連れてくるために行ったん退室。

涼子さんは心底困ったような顔をしています。

「涼子ちゃん、お久しぶりですよ！」

「お、おう…」

久々の再会に喜びりんごさんと、びっくりする涼子さん。
亮土君がいないところまでおどおどするんですね。

「えっと、それでは内容の方に移らせていただきます。」

「あ、そうでしたね。涼子ちゃんとの再会に多いに浸りたいのは山々ですけど…」

「話は後でならいいんだろ！
今は内容話せよ！」

りんごさんと会ってから、ちょっとだけ昔に戻りましたね。
さすがりんごさん、引き出し方が巧妙です。

「それがですね…」

ちよつと目線を変えて亮土君の方に見てみるとしましょう。

「きーさーらーぎー…」

ある木陰に向かって、何度か話しかけている亮土君。
なにもないのに話しかけている亮土君は若干痛そうな人ですが…

「そろそろ起きろ！」

「うわっ！」

亮士君が木を揺らした途端、一人の男の子が降りて：いや落ちてきました。

その姿を見て、亮士君はため息をもらします。

「お前、今日休むつもりだったのか？」

「だって今日テストでしょ？」

人と話すの嫌いな人に、そんな事させる教師はどうかと思うけど。」

彼の名前は如月きさづき要君。

本人の言う通り、人と話すのが嫌いな、シャイなのかちょっと分からない男の子です。

ただ、昔の亮士君みたいなタイプでもあります。

「先生だって昔はそうだったんでしょ？」

「昔は昔、今は今だって。」

とりあえず行くぞ。」

如月君の袖をひっぱり、御伽銀行地上支店へと連れて行くこととする亮士君。

体育科ということもあり、結構力は強いです。

「弥生は？！弥生はどうするのさ！！」

「お前の後に連れて行くから、先に行つてなさい。」

ちなみに、行ったかどうかは涼子と睦月に聞くからな？」

「涼子？ああ、先生の奥さんね。
つて来てるの？！」

あ、あといい忘れてましたけど、如月君はかなりの女好きです。
その性格はあの浦島さんを彷彿とさせます。

「んじゃ行ってくる!!!」

はしやぎながら去っていく如月君。
ホントに浦島さんみたいですな。

「よし、今度は弥生か…」

またひとつため息をつきながらとある場所へと向かっていく亮士君。

まだまだひっぱります！

りんごさんの依頼内容、弥生さんの居場所や性格とは?!

ぶっちゃけた話、文字数関係も入ってたりww

第三話（後書き）

またも中途半端ですが、書いてたらキリなさそうで怖いです。
次に進みます。

何か感想とかありましたらよろしくお願いします。

第四話（前書き）

もうなんか早めに切りよくしないと、なんか後味悪いですね。
ってことで仕上げますよ。頑張ります！！

第四話

亮士君が向かった先は、さっき如月君がいた所からそこまで遠くないとある木の下。

「よく涼子はここで寝てたよなあ…」

そう、ここはよく涼子さんが昼寝をしていた木の下なのです。そしてその木の上では…

「今日も元気だね♪」

ソラはいつも私の近くに一番に来てくれるもんね♪」

一人の女の子がたくさんきりがややよいの鳥たちと戯れています。

次々に、絶え間なく鳥たちが集まってくるために木の上では大合唱が繰り広げられています。

その姿を見た亮士君、またもため息をつきます。

「…弥生、そろそろ降りてこないか？」

「あ、先生！」

もうちょつと待ってもらえますか？」

彼女の名前は桐ヶ谷弥生さん。

学園一のマイペースという名で知られ、暇さえあればこの場所に足を運んで鳥たちと戯れているのだ。

とにかくほんわかしてて、誰とでも仲良くなってしまう子。

ただ、ちょっとした視線恐怖症を持っているので溶け込むのが上手いという子ですね。

「ほら、依頼主も待つてるぞ。」

「ミノが離れてほしくないって言ってる…」

あと、補足として弥生ちゃんも動物の言葉が分かるというハイスぺックの持ち主です。

「んじゃソラ、こっちにおいで。」

そして亮士君も、弥生ちゃんのおかげで大体の動物のことが分かってきています。

ソラと呼ばれた鳥は誘われるように亮士君の方に飛び乗ります。すると他の鳥たちも亮士君の方へと向かっていきます。

「この子たちは僕が何とかしておくから、弥生は早く行きなさい。」

「はあゝい。」

「サボるなよ？睦月と涼子に聞くから。」

「奥様来てるんですか！

それじゃあいきます！」

如月君と変わらないことを残してプレハブ小屋へ行った弥生ちゃん。

彼女は前々から涼子さんに会いたかったようで、とても嬉しそうです。

「あつちは進んでるかな…」

「つとことは、僕らがするべき事とは今お話した内容でよろしいと?」

「そうですの。」

睦月君、呑み込みが早いんですね。」

「ありがとうございます。」

それでは一旦調べてみますので、涼子さんとお話ししててください。」

睦月君、どこからともなくノートパソコンを取り出すと、無言で何かを調べ始めました。

その仕草の一つ一つにも、りんごさんの面影を感じます。

「ひ、久しぶりだな...」

「そうですのね...」

そんなわけが残った二人は昔懐かしの雑談に入ることになります。

「あのころはどうなるかと思いましたのよ?」

「あ、ああ...」

でも今は亮士がいるから...」

「そついえば森野君、大変みたいですね?」

「え？」

「教師やって、涼子ちゃんのお世話して、その中で自分の欲を抑えているなんて…」

「そ、そんなわけないだろ!!」

そっち系の話になると、昔と変わらず顔を真っ赤にする涼子さん。まだそっちの方向の耐性はつけていない様子ですね。

「全く、大変極まりないですよ…」

「楽しく話すなよ!」

そんなりんごさんがニヤニヤし、涼子さんが真っ赤になっている所に一人の男の子が。

「森野涼子様、お初にお目にかかります、如月要と申します。
やはり噂通りお美しい方だ。
どうです？今からお茶でも？」

一瞬で涼子さんとりんごさんを見分け、すかさずナンパをしかけます。

そという所はもう浦島さんのお弟子さんみたいです。

「りんご…」

「もう会わないと思ってましたのに…」

「浦島みたいなやつ、まだ世の中にはいたんだな…」

「要！！」

呆れかえっている所に、もう一人の一年生、弥生ちゃんの登場です。

「ギクッ！」

「何度言ったらわかるの！！
まだ仕置きが足りてないみたいね…」

「ま、待て！

話せばわかる…！！！！」

ずるずると連れて行かれる如月君。

その姿は二人には乙姫さんと浦島さんの、あの状況を思い浮かべる
ほかありません。

「…あれはいつものことなんで、気にしないでください。」

「そうそう、浦島さん達みたいだろ？」

「「亮士」（森野君）！」「」

遅れながら登場した亮士君。

亮士君の姿を見た途端、亮士君に飛び込んだ涼子さん。

「ぎゅ…っ…して…」

「分かってるよ。」

壊れないようにギュッと抱きしめる亮士君。男です。

「そっいえば睦月、話は聞いたかい？」

「はい。」

大体的内容はですね…」

次回は話の内容について！
以上！！！！

第四話（後書き）

一応最初のオリキャラは登場終了ですw

次回の前にオリキャラのプロフィールを挟もうと思います。

それでは感想等ありましたら、よろしくお願いします。

オリジナルキャラクター紹介 その一（前書き）

題名の通りです。

今回はこの小説のオリジナルキャラクター達の説明をしようと思います。

まあまだ三人ですが、後最低でも九人は出ますよ↑え

っという事で最初の三人である、一年生トリオを紹介します♪

オリジナルキャラクター紹介 その一

むつきのぶてゐ

睦月伸輝

15歳 男 152cm 31kg

一年生トリオの中で、情報を担当するちゃっかりな男の子。

学園中のアイドル的存在で、上目遣いで迫られたら何でも言う事を聞いてしまいそうな容姿。

しかし、仕事となると顔を変え、残りの二人をきつちりと仕切る。

性格は若干りんごさんに似ており、りんごさんの話を亮士君から聞いた時、『師匠』と呼んだことも。

依頼時、依頼主がりんごさんとは気が付かず、似ているなあと思っていたらしい。

りんごさんと気が付いた時の描写は近々書く予定。

きさらぎかなめ

如月要

15歳 男 173cm 42kg

一年生トリオで、力仕事を主とする女たらし。

仕事の時に女の子にちゃやほやされたことがよほど嬉しいらしく、気が付くとあんな風に。

趣味は昼寝とナンパで、木の上で居眠りをしていることが多い。

性格は話の通り浦島さんそっくりで、弥生ちゃんという彼女もいる。

依頼時、涼子さんを口説こうとした際、弥生ちゃんに連れて行かれたのも浦島さんと同じような理由から。

連れて行かれた後の内容は…近々書く予定（汗）

桐ヶ谷弥生きりがややよい

15歳 女 153cm 33kg

一年生トリオで、校外の情報を集める超能力者↑

動植物と話すことが可能で、休み時間はいつも木の上で鳥たちと戯れている。

亮士君に動植物の言葉を伝授した、ほんとにすごい期待の新人。

だけど、亮士君とこれまた似た性格で人と話すのが苦手で視線も苦手という、視線恐怖症で対人恐怖症。

現：御伽銀行メンバー以外、人と接することはほぼなく、クラスでは空気のようになっている。

しられてはいないが、如月君と現在お付き合い中。

ナンパをしている所を見つけると、風のように現れて風のように去るという。

依頼時、涼子さんを尊敬していた弥生ちゃんは会いに行つたところ、如月君がものの見事に口説いていて連れて行ってしまう人。

だけど、本当に礼儀のなつた、いい子なんだけどね…（汗）

オリジナルキャラクター紹介 その一（後書き）

gdgdな感じで申し訳ない<>

何かかけている所とかありましたら、レビューとかで指摘してください<>

それでは、次は本編に戻ります。

第五話（前書き）

更新を滞らせて申し訳ありません<> 最近テストなどで更新できなくて…

この話は前回のりんごさんの依頼の内容を書いていこうと思います。駄文ですが、お付き合い願います。

第五話

「それで睦月、話はとうだったんだい？」

「はい。簡単に話すと、パーティーの開催場所と、運営をしてほしいんだそうです。」

「パーティー？」

亮土君、首をひねってりんごさんの方を見ます。
例によってりんごさんは、ニヤニヤしています。

「赤井さん、何考えてるんですか？」

「いいえ？別に特に何も考えていませんよ？」

あらら、あからさまに何か隠しているような素振りを見せています。
これは絶対何か隠してますね。

「睦月、詳しく話は聞いたのかい？」

りんごさんに聞いてはダメと思い、睦月君に聞くことにした亮土君。
ですが…

「ええ。聞きましたけど、赤井さんが先生と涼子さんには内密にと
…」

「涼子、話は聞いた？」

「き、聞いてない…」

「それは当たり前ですの。睦月君と二人で話し合っていたんですから」

ぬかりはない、そういつてまたニヤニヤするりんごさん。

なんか危ない方向性のことなんでしょうか？

いやでも、パーティーと言ってるんですから、そこまでもないんでしょうけど。

「パーティー?!」

「祭りと聞いたらうちらが黙っちゃいないよっ!」

突然台所から姿を現した二人の女子生徒。目をキラキラと輝かせ、その仕事は自分たちに任せると言わんばかりです。

「あ、卯月うづきに五月ごご!今日は1年のテスト依頼といっただろ!」

その二人にすかさず突っ込むのはやはり亮士君。最近突っ込みが定位置についたようです。

彼女たちは2年生。卯月奈実さんと國崎五月くにさき むつぎさん。二人とも面白いくらいうまが合い、趣味も何もかもが合致しているという素晴らしい方々です。

しかも、祭りなどの大騒ぎする行事には目がないという、とても活発的な二人です。

「だって先生!祭りですよ祭り!」

「パーティーと言っただろ！」

「パーティーでも騒ぐんでしょ！」

「俺もそこまで話は聞いてないからわからないよ！」

「り、亮…土…」

あまり騒がしいのが嫌い、もとい好きではない涼子さん、そろそろ限界らしいです。

亮土君の袖をギュツとつかんで震えています。

亮土君に構ってもらえなかったのも地味に来ているようです。

「…ああ、すまなかった。」

その様子を察した亮土君、すかさず涼子さんを抱きしめて触れるだけのキスをしました。

「／／／／」

「大丈夫、お前のことはいつも一番に考えてるから。」

「………見せつけてくれやがって（ですの）。「………」

あらら、ここにいる人全員が呆れた表情を……ってなんか人多くありません？

「今からまた口説こうと思っていたのに……」

「要？まだ飽き足らないの？」

「いえいえっ！滅相もない！！」

「つとつか弥生、仕置きをしてるのが遅いよ。」

「ごめんね睦月、一人で大変だった？」

「私達の初の登場シーン、マジで台無しだよ……」

「ここしかない！ってくらいのタイミングで登場したのに……」

「私なんて、同い年なのに。そして今回に関してだけいえば依頼者ですよ？」

みんなそれぞれの理由があつてのこの表情なんでしょうね。

まあ、分からなくてもいいですが。

「……つとりあえず、赤井さんの依頼を軽くまとめると、冒頭のようになるわけだよな！」

（（（（（盛大に話をそらしたな））））））

ここにいる人全員（涼子さんを除いて）、同じことを思いながらうんとうなづいた。

「それじゃあ残りは僕らに任せて平気だから。
パーティーはいつ行っ予定なんだい？」

「ああ、それについては全部睦月君に話しましたから、睦月君に後は任せましたの。」

そういつてりんごさんは地上支店から去って行きましたとさ。

第五話（後書き）

ムムム…何という終わり方＜＞

つとまあ、こんな感じですが次に続きます！

何か感想等ありましたら、よろしく願います！

第六話（前書き）

最近親の目が厳しくなり、更新が鈍くなってきたしまいました＜＞
でも頑張ります！頑張っているので駄文ですがお付き合い願います
＜＞

第六話

「地下本店…久々に入る…」

そう呟いているのは涼子さん、なんだか新鮮と言わんばかりの表情で周りを見つめています。

無理もないでしょう、何しろ何年かぶりの地下本店なのですから。

「それより亮士、いいのか？」

「なにが??」

「さつきりんごには御伽銀行の人以外はダメって…」

ちよっとおどけている涼子さん、その姿を見た亮士君は盛大にため息をつきます。

「お前がいないと俺の調子が狂うんだよ。」

何より、お前を残してここに行くと罪悪感で俺が死んでしまう。」

ギョツと方を抱きしめ、にこりと笑う亮士君。カッコいいです、漢おとこです。

「そっか…ならいいんだけど…」

「だからそんな顔、しないでくれよ。」

若干しけた顔の涼子さんを見た亮士君、とてもつらそうな表情。そんな表情を見た涼子さん、オプシヨンに花とかついちゃうんじゃ

ね？つというような笑顔で見つめます。

「分かった！」

「っ！／／／／」

「要、何照れてんの？」

「先生たちのラブラブな感じを見てたらこっちが照れてきたよ…」

「如月、それは慣れるしかないよ。」

「だけど睦月ちゃん、すごく目がピクピクしてるけど、大丈夫？」

「奈実、たぶんそれは突っ込んだら負けなんだと思う。」

そんなラブ満開な二人のオーラに、早くも大打撃を受けているのは
現：御伽銀行メンバーの皆様方。

まああんな姿を見せつけられたらまあ誰でも打撃は受けますよ、仕方のないことです。

「先生…ちよつと自重とか…」

「俺達が生徒に自重をしないとイケないのか？」

即答をされた睦月君、もうどうしようもないですね。ハイ。

そんなこんなでついた地下本店。

相変わらず、上の支店とは大違いな設備です。

「文月^{ふづき}、助けてえゝ!!」

「ど、どうしたんだよ。」

入った途端、卯月さんはものすごい勢いで男子生徒に抱きついた。彼もそんな卯月さんを受け止めた。

「先生が…先生があ…!!」

「森野先生、何かあつたんですか？」

「文月、そこまで気にしないでも大丈夫だ、俺はお前の彼女に何かしたわけではない。」

彼の名前は唐沢文月君^{からさわふづき}。

亮士君が言っていたように、卯月さんと現在お付き合い中なのです。まあ涼子さんという奥様がいるのに生徒に手を出したら、男…以前に人間失格です。

「まあ大方、いちゃついていた先生たちに耐えられなくなっただけでしょ。」

「なんで知ってるんだ？奏は。」

「五月、ここは地下本店だぞ？支店の様子なんて、丸見えだろ？」

「あ、そっか。」

先ほどからクールな口調で話しているのは、水無月奏さん。みなづきかなで五月さんとガールズ的なラヴ疑惑が勃発中なお二人です。

まあ、卯月さんとの様子を見る限り、違うとは思いますが。

彼女は周りからも恐れられるほど、冷静沈着で近寄りがたい存在です。

ただ、仕事のスピードは御伽銀行一です。

「…そろそろ本題に入ろうか？」

そろそろ恥ずかしくて限界を迎えたのか、亮士君が話を振ってきました。

「そうですね。そろそろ本題に入って仕事を終わらせましょう。」

容姿だけならかなりいい方なのに、物凄い睨むように亮士君と涼子さんを見ているため、涼子さんはおどおどしすぎて震えています。そんな姿を見かねた亮士君、ちょっと微笑んで耳打ちを。

「アリス先輩と思えばそこまでもないよ。」

そんなに緊張しちゃうだめ、もっとリラックスにいいこ？」

「う、うん…」

そんなこんなでつきにつづきます。

第六話（後書き）

いやあ…

なんか凄い中途半端… < > < >

ホントに申し訳ない< >次はすぐ近くに書く予定！

オリジナルキャラクター紹介 その二（前書き）

とりあえず二年生陣が登場したので、ご紹介します^^
べ、別にスランプ状態だからって気晴らしにやってるわけじゃない
んだから！

オリジナルキャラクター紹介 その二

卯月奈美 うづきなみ

16歳 女 158cm 38kg

二年生の中で情報収集担当する、すごく活発的な女の子。
祭り好きで常にプラス思考に考える、とても明るい子。
文月と交際中で、抱きつく癖がある。（文月だけだが）

りんごさんのパーティー話を聞いて、地下本店から湧いて出てきた人。

五月ともむちゃくちゃ仲がいい。

國崎五月 くにばきなつき

16歳 女 156cm 35kg

二年生の中で情報収集を担当する、基本は冷静だがメリハリがある、活発的な少女。

卯月と同じく祭り好きだが、自分の楽しいこと以外は全く興味を示さず消極的。

ちなみに好きなことは全力で取り組む。

りんごさんのパーティーの話を聞いて、地下本店から湧いて出てきた人。

卯月と一緒にいて楽しいからという理由で、いつも一緒にいる。
基本は一人が好き…らしいw

水無月奏 みなづきかなで

17歳 女 163cm 39kg

二年生の中で説得を担当する、クールで目つきのキツイ仕事のできる子。

才色兼備、なんでもできる彼女だが、あまりの目つきの悪さに男子からは近寄りがたいと評判。

言葉を巧みに操り、依頼主からの内容はすぐさま遂行、犯人には何事もなく自白させるという、恐ろしい言葉の匠の誘導尋問タイプ。

目つきのにはとても悪いが、恋もしたいお年頃なので、今の時期は落ちやすかったりするのですよ…？

とはいえ、そんな仕草はまったくもって見えませんがねw

からさわぶつき

唐沢文月

17歳 男 174cm 53kg

二年生の中で力仕事を担当する、冷静沈着な男の子。

卯月と交際中で、卯月のピンチ・悪口などを見かける・聞くとものすごい勢いで怒る。

力も強いので、あわよくば大怪我までさせてしまっ、というほどの力の持ち主。

抱きつかれるとすぐに赤くなるという癖を持つ。（卯月のみだが）

運動能力は非常に高く、並の男では勝つことができないという（しかし亮士君だけはなぜか勝てない。理由は不明らしい。）

二年生はこのような感じですね。

まあしばらくしたら、三年生の紹介もします。

三年生は五人いますので、お願いします^^

オリジナルキャラクター紹介 その二（後書き）

しばらくしたら本編もやります<>
なにかありましたら、よろしく願います！

第七話（前書き）

おまたせしました！

本編やります！

駄文ですが、お付き合い願いますっ！

第七話

「それで？依頼内容とは？」

依頼主はおとぎ銀行のOGである赤井りんごさんですね。」

話を進めると同時に、資料にも目を通し始める奏さん。
さすがは仕事人です。他人とは一味も二味も違います。

「赤井りんごさん、20歳、身長は142cm、体重は…」

「ま、待て！そのあとは言わないでくれ！！」

奏さんが何の躊躇もなく読み上げようとした乙女の秘密を、ギリギリのところで止める涼子さん。

さすがは親友だっただけはあります。心やさしいですね。

「？」

そんな心遣いも気がつかない奏さん。ある意味鈍感ですね。女の子なのに…

「私だって女ですよ！恋だってしたいですよ！」

あ、今地の文に突っ込んだと同時に、心の声も聞こえましたね。
顔を真っ赤にしたところで変わりませんよ、奏さん…

ほら、みんなも顔がちよつとにやけてたり、安心した顔だってしますよ、亮士君に関しては。

「と、ともかく！」

おや、その状況を打開するように話を進める奏さん、なかなかわいらしいです。

「彼女は涼子様と中学時代からのご親友で、家族構成は少し複雑。

実のお母様とお父様と豪邸住みだったそうですが、お父様はこの学校の卒業生の白雪姫乃様のお父様で、義とはいえどお二人は御姉妹
……」

「そこはもう飛ばしてくれ。」

「涼子の言うとおりだ。赤井さんのあの話は思い出だけで十分だ。この件にも関係ないみたいだし。」

あの頃のことを思い出したのか、二人ともその辺にしておけと一声かけます。

「わ、わかりました。」

その様子で何かを察したのか、奏さんはパフッと音を立てて資料を閉じます。

「とにかく今回の依頼内容を聞かないことには話は進みません。先生、今回はどのような内容なんですか？」

「ああ…それが俺自身、よくわからないんだよ。」

少し困ったような表情になる亮士君。

こればかりは何ともありませんね、内容聞いていませんし。

「え？」

「この件については、依頼主の赤井さんが睦月にしか話さなかったんだよ。」

「だからこの件は完全に生徒のみで運営してほしい。」

「あと、赤井さんからのお話によれば、今回は先生たちは口出し無用、とのことですよ。」

「そこまで言っただけですか、りんごさんは。」

「まああの人ならやりかねません。りんごさんですしね？」

「そういうことだ、だから俺たちは家と学校で見守らせてもらうよ。」

「でもりょーちゃん、乱舞ちゃんに怒られないの？」

「おっと？少しおっとりした声が聞こえてきましたね。様子と声だけを考えるとかなりのマイペースです。」

「おお葉月^{はづき}、いたのか。」

「葉月だけじゃないぜ？俺だっている。」

「なんだ長月^{ながつき}もいたのか。」

「えへへへへへへ」

この二人は三年生の岸野葉月さんと林田長月君。

お二人はここ最近できた、新しいカップルさんなのです。

「りょーちゃん、このままだとまた減給だよぉ？」

「ああ、そこに関しては大丈夫。

また説得するから。」

「でも先生、最近説得力がない！って言われたばかりじゃ…」

「いいから心配すんなって。

今回は説得力を強くする助っ人だっているから…」

そう言ってちらりと目線を涼子さんに向ける。

ああ、今回はとても美しい方がいらっしやいますものね。

「??？」

涼子さんにはわからなくても平気だと思いますよ。
ちよっとしたらわかると思うので。

「それじゃあちよつとばかり、説得してくるよ。」

亮士君、涼子さんを連れて一度地下本店から出て行きました。

次はあの理事長の登場ですよ…！！ww

第七話（後書き）

どうでしたでしょうか？

まあもうちょっとしたら一応一回目のオリキャラは全員出番を迎えます。

あれ？頭取とかは？

そう思っても大丈夫ですからってことで^^

また感想等がありましたらお願いします！

第八話（前書き）

この前書いてたんですけど、まさかのエラーで全部消えてしまった…
もう一度書きなおしました^^

よろしくお願いします！

第八話

「なあ亮士……」

「ん？」

「今、向かってる所って……」

「ああ、お前の思ってる所で間違いないよ。」

今、お二人はあるところへと向かっています。
どこかへはこの前の話を参照に推理してみてくださいね。

「でも……」

「いいから、とりあえずついてきて」

「う、うん……」

「あと、理事長に会うから、口調は昔に戻してくれると嬉しい。」

「あ、あの口調は亮士の前でやるのは……」

「俺からの頼みだ。」

頼む、やってくれないか？」

手を合わせて頼みこむ亮士君。
随分と低い腰、昔みたいです。

「わ、わかった…」

いつもより少し不機嫌になる涼子さん。
でもその口調、昔にちよつとだけ似ています。

「ありがとな。」

お礼の意味でほほに口付けする亮土君。
その瞬間、涼子さんの顔は赤くなります、当然の末路ですね。

「お、おまつ!!」

恥ずかしくなったのか、ものすごい勢いで殴った涼子さん。
そこまで戻すと帰って亮土君が危ないですよ。いくら殴る力が弱く
たつて。

「そ、そこまで戻してもらえとは…
なんか頼もしいッスね、涼子さんは。」

おやおや、亮土君まで口調戻ってるじゃないですか。
大丈夫でしょうかね？

「それで？
今回は何を頼みに来たんじゃ？」

「ハイ、今回は御伽銀行の依頼の件できました。
今回はぼくが手を下す必要がない、むしろ手が出せないということ
で部活休暇をもらいに来ました。」

「またかの。」

おぬし、最近休みすぎと教員長に言われたばかりなのじゃが…」

「そこをなんとか。」

僕らがいると彼らも都合が悪いと…」

今、亮士君と話をしているのは理事長こと荒神乱舞さん。
ちらちらと涼子さんの様子をうかがっています。
涼子さんが誰か、把握していないようです。

「まあ依頼主がりんごちゃんと聞くしのお…」

「そうなんです。」

依頼内容も僕らに教えてくれなくて。」

「そうなんですよ。」

りんごさん、全く内容を教えてくれないんですよね。

「時に森野よ。」

「はい？」

「おぬしのとなりにいる女子おなこは誰じゃ？」

ずっと気になっていた乱舞さん。

耐えきれなくなり、聞きましたよ、ついに。

そしてその言葉を待っていたかの亮士君。
にっこり微笑んで答えます。

「妻の涼子ですよ。」

「涼子?!あの大神か?!」

「ちがう！」

オレは大神じゃなくて、森野涼子だよ！」

顔を真っ赤にしながら答える涼子さん。

かわいいですね、あのころを彷彿とさせますよ。

「ほうほう、お主ら結婚していたのか。」

「ええ、今年の春に。」

「いやあ、あのツンツンの涼子もついにデレたのかのお。」

「オレはツンデレじゃねえよ！」

いまだに顔を真っ赤ですが、まんざらでもないところを見ると、自分でもちよつとは認めてるんしょうね。

「それで、涼子がここにきているということは何かあるのじゃろ?」

「ええ、涼子からもなんか言ってくれるか?」

「お、おう……」

ちよつと緊張してる涼子さん。

エロ爺と騒いでいたころが懐かしいですね、全く。

「え、エ口爺！」

「なんじゃ？」

「亮士がここまで頼んでんだ。
休暇くらい、いいじゃねえか。」

「だかの、教員長に色々くぎ刺されてのお……」

ちらちらとみる乱舞さん。

何かを待っているようです。

「あと少し説得、してくれば話は別じゃろうがお……」

「うう……」

あの表情、やらしいですね。

何か待ってますよ。あの表情。

そしてその表情に気が付いている涼子さん。悔しそうですが、決心したのか、叫びました。

「お、オレは……あたしは……」

亮士と一緒にいたいのに……一緒にいたいのに……！」

その叫び声とともに、乱舞さんはすぐさま書類をにやついた表情で

亮士君に渡しました。

そしてその亮士君の表情も、また緩んでいましたとさ。

そして涼子さんは…

「なんでそんなにニヤニヤしてんだよお！」

顔がゆでだこのように真っ赤だったとさ。

第八話（後書き）

自分の終えての感想。

涼子さんのツンデレ、萌えええええええええええ！！

っということ乾燥お待ちします！

第九話（前書き）

お久しぶりです！

って果たしてこの小説を見てくれている人はいるのか…？

っということを書いていきますw

第九話

「さて、これで交渉は終わったわけだけど…」

ちらりと横目で涼子さんを見る亮土君。

ああ…見るからに不機嫌ですね。さっきのが効いたようです。

「さっきから言ってるだろ？」

「ごめんってさ…」

「でもあたしを使ってあんなこととして！
お前にしてはひどいって！」

「だからあれはお前がいなくてどうしようもなかったんだよ！
涼子も聞いただろ？俺、教員長に少し目をつけられてるんだよ…」

そう、亮土君は休みがちということで少し理事長にひいきされすぎ
ではないかと怒っているのだ。

とはいっても御伽銀行の問題だけに、不通に先生に言えないので怒
られるだけの亮土君。

かわいそうですね、実にかわいそう！

「ジジイの話を聞くには…」

教員長、猫先輩だって聞くじゃなか！」

そうなんです、実は教員長は猫先輩なんですよ。

理事長に頼まれて断り切れなかったみたいなんですよ。

しかもかなりの教え上手なんだとか。

ちなみに教科は数学だそうです。

「まあ猫先輩も色々あるんじゃない？
俺も怒られて驚いてるんだから。」

「昔はすごく頼りになってたけど…
今はいやっ！」

「どうしてさ？」

「あたしと亮士の中を裂く人はみんな嫌いっ！」

涼子さん、それはさすがに言いすぎ…

「ハハハ…」

ほら、亮士君もどう対処していいか分からなくなってるじゃないですか。

「とりあえずまだ紹介終わってないからさ。
一回御伽銀行、もどろ？」

少し困った表情の亮士君を見た涼子さん、少し口を尖らせていますが、了承しました。

「うん、ありがと。」

その表情を見た亮士君、すっかりほほを緩ませて笑顔になりました。
その表情、反則ですって<>

そんなナレーターを無視し、トコトコと御伽銀行へ戻る二人。
すると先ほどとは見かけない人がいます。

「やあ先生。」

背が大きくて涼子さんですら見上げてしまっほどの威厳をもってます。

さあて、この人は？

「やあ走良^{そりょう}」

「これはこれは噂の涼子さんですか？
睦月さんたちから話は聞きました。」

「月陰^{げつゐん}もいたか。」

「いやあ、睦月たちに地下本店には行かせるなってうるさいもんだから。」

ご紹介おくれたね、僕の名前は師我走良^{しがそりょう}、一応頭取です。」

彼、背のでかい男の人はご紹介してくれた通り、この御伽銀行の頭取を務める、師我走良^{しがそりょう}君。

大きな身長を利用して、勢いで情報を収集する人。

それに対してとなりにいるのは副頭取の霜野月陰^{しものがつゐん}さん。

その完全に頭取と対照的な身長で相手を魅了しますが、全く男に興味なし。

興味あるのは走良さんだけだとか。

「霜野月陰^{しものがつゐん}と申します。」

以後、お見知りおきを。」

礼儀正しいのも月陰さんの持てる一つだそうです。

「でも俺と涼子の荷物、下に置いてきたんだけど…」

「ああ、それなら心配ないよ。」

どこからともなく、声が聞こえましたね。
ここにいる4人のだれかではありません。

そしてこの声、どこかで聞いたことがあります。
誰の声かって？

涼子さんの様子を見てください。

一気に亮士君の腕にしがみつくや、その腕を離そうとはしません。
そして齒はガタガタと揺れ、おびえています。

「そんなにおびえなくてもいいじゃないか、涼子ちゃん。」

「ひっ！」

さらに怖がる涼子さん。

腕に込める力をさらに強めます。

そして現れたのは……

「ひ、羊飼？！」

なんと、あの羊飼？！

第九話（後書き）

つといることで、今日はここまでw

まさかの羊飼登場?! w w

真相は…近々書きます。

第十話（前書き）

感想で見てくれている人がいてくれたことに喜びを感じています！
頑張って更新するので、よろしく願いしますっ！

第十話

「り、亮士……」

「どうしたんだい？涼子ちゃん。」

「ち、近寄るなっ！！」

すさまじい勢いで亮士君の陰に隠れる涼子さん。

その姿を見て亮士君は若干の苦笑とあきれが交じった表情を浮かべています。

「…かみなづき神無月、変装も程々にしろって言ったる？」

「…へ？」

「ちえ…」

先生、もう少し遊ばしてくれたっていいじゃないですか……」

すると羊飼（？）の顔はみるみる剥がれ、正体を現したのは一人の男の子。

その表情はどことなく不機嫌で亮士君をにらんでいます。

「涼子が怖がつてるんだ。」

止めるのが夫の務めであり、教師の務めだ。」

「チッ……」

「えっと…亮士…？」

すっかり困惑している涼子さん。

無理ありません、さっきまで羊飼だったのが今では普通の学生に変わっているのです。

無理もないでしょう。

「ほら、すっかり涼子も困惑してるじゃないか。」

「だって…」

彼の名前は神無月孝君。
かみなづきたかし

変装大好き、人を困らせること大好きな、ちょっといたずら好きな子です。

多分、この現：御伽銀行のメンバーの中で一番の問題児といってもいいかもしれません。

「こいつは変装大好きな困ったやつだよ。」

「え……？」

「要は、頭取っぽくて赤井さんみたいな策士なんだよ。」

「…一番たち悪いじゃんか…」

「失敬な！」

僕はれっきとした普通の人…」

「「じゃないよ。」」

その見事にはもったのは走良君と月陰さん。
二人は幼馴染と聞きますし、そのくらいはいつものことなんですよ。

「孝、いつも問題引き起こしているだろ？」

「そのおかげで私がいつも苦労してるんですから……」

「え？頭取がいつも苦労してるって……」

「走良……？」

「いや、それはその……」

「どう？見てて和むでしょ？」

「た、確かに……」

そうなんです。

この三人、なぜか見てるだけだと落ち着くくらい面白いんです。
そう、それはものすごいくらいに。
さっきまで怯えていた涼子さんの頬があっという間に緩んでいます。

「ほら涼子、いつの間にか笑ってる。」

「あっ……」

「こいつら、面白いんだよ。」

「うん……」

「あの……」

勝手に見て和まないでいただきたいんですが……」

「ほんとだねえ……」

「ったく、こっちはサプライズ気分でやってたつてのに……」

驚くどころか、いきなりネタばれされて、挙句の果てには面白がられてたら、やってる側はつまらないですよね……
その気持ち、すっごくわかります。

「ま、まあとりあえず神無月。」

「なんですか？」

「したから僕らの荷物、持ってきてくれる？」

すっかり任務を忘れていた亮士君。

涼子さんにちよつとだけ促され、我に戻ったのでしよう。

「了解しました。」

「ありがとう——」

「あ、でも。」

「ん？」

「生徒がいる前で、いちやつくのはいけないと思います。」

神無月君、珍しく正論を言ったのち、とぼとぼと地下本店へと向かいました。

その時の涼子さんと亮士君の表情は、なぜか真っ赤だったとき。

なんか、ムカつく！

とかナレーターが言ってみる。

第十話（後書き）

ハイ、最近スランプでうまい作品が考えられません＜＞

感想とかあつたら、嬉しいと思います＜＞

オリジナルキャラクター紹介 その三（前書き）

最近スランプになってしまい、どうしてもいいか分からなくなってきました<>

つという事で気晴らしにキャラ紹介でもw

今回は三年生です^^

オリジナルキャラクター紹介 その三

岸野葉月
きしのはづき

17歳 女 154cm 43kg

三年生の中で説得担当。

御伽銀行の中で一番おっとりしているが、言葉の力は御伽銀行の中でトップクラス。

マイペースであるが、結構しっかりしている。

長月とは最近付き合い始め、幸せオーラが全開である。

初登場時も長月にべったりで、幸せオーラ全開であった。
管理人自身、結構嫉妬していたのは内密にw

林田長月
はやしだなつき

17歳 男 174cm 53kg

三年生の中で説得担当。

御伽銀行の中では結構しっかり者。

葉月と付き合い始め、今では幸せオーラ全開である。

葉月をけなされると、ものすごく怒る。

初登場時も葉月にべったりで、幸せオーラ全開であった。
管理人自身、結構嫉妬していたのは内密にw

神無月孝
かみなづきたかし

17歳 男 185cm 54kg

三年生の中で情報収集担当。

変装・いたずら大好きな問題児。

自分の悪戯を邪魔されると、とても不機嫌になる、自分勝手な人w
でも、情報収集能力は御伽銀行一番。

初登場時、羊飼の変装をして涼子さんを驚かせた人。
あの後、亮士君にこつてり怒られたそうなのw

しものけつじん
霜野月陰

18歳 女 145cm 43kg

御伽銀行副頭取。

頭取がしっかりしていない分、かなりのしっかり者。
ただ、緊急時にはすごく弱い。

初登場時、頭取と登場し、なんだかんだでしっかりしている所をみ
せた。

アリスさんに若干似ている所アリw

しがやうぢ
師我走良

18歳 男 189cm 64kg

御伽銀行頭取。

しっかりしてないが、いざという時に役に立つ。
身長が大きい分、かなり目立っているが、そこまで目立ちたくはな
いとのこと。

初登場時、副頭取と登場し、なんだかんだでダメなところを見せた。
リストさんに若干似ている所アリw

オリジナルキャラクター紹介 その三（後書き）

これで第一弾オリジナル紹介を終わりますw
もし好評だったら、この後も書こうかなあ
…
なんて思ってますw

第十一話（前書き）

なんだかんだで10話超えましたねw
頑張ってる証拠です↑何ぞ

っということスランプな主ですが、見てください<>

第十一話

「はいよ、先生。」

神無月君、無造作に亮士君に荷物を渡します。

昔の感覚がまだ残っているのか、何事もなく受け取ります。

「相変わらず先生はこういうのとの得意だよな……」

「いや、ある種の条件反射だからな。」

俺自身もどうしていいかわからないよ。」

「でもいいんじゃないか？」

その方が、あたしも安心できるし……」

相変わらず亮士君の後ろに隠れている涼子さん。

亮士君の服の袖をつかんでいるあたり、すごくかわいいです。

「涼子さんはとんだ怖がりですね。」

「「お前が悪い。」」

すぐさま頭取・副頭取に突っ込まれる神無月君。

かわいそうです、本当の話なので特に突っ込み入れません。

「とりあえず、お前らに任せるからな。」

「わかりました。」

「あといい忘れてたけど、これはあくまでも一年のテスト依頼だからな。」

あんまり手助けするなよ？」

念を押す亮士君。

そう言えばこれ、一年生のテスト依頼だったんですね。

みなさん、覚えてました？

「わかってますよ。」

でもまあ、問題を起こさないように監視だけはしておきますから。」

「ああ、お前らが頼りだからな。」

「任せてくださいよ。」

走良君に任せると、亮士君は後ろで怯えている涼子さんの頬にキスをした。

「あっ…／／／／」

「もうおびえなくても大丈夫だからって伝えたかったんだけど…」

「く、口で言ってくれれば…／／／／」

「そう、それじゃあ・・・」

「おまつ！なんでそんなに顔近付けて…」

「先生。」

「ここ、学校つといることを忘れないでいただきたいです。」

月陰さんが釘を打って亮土君たちを止めにかかります。
ナイスです、ナレーターは嫉妬してましたw

「うしつ、それじゃあな。」

「…また。」

亮土君と涼子さんは挨拶をすませると、帰路についていった。

ここは変わって御伽銀行地下本店。

みなさんにはちょっと早めにりんごさんの企みの種明かしをしよう
と思います。

「つというか、パーティーくらい明かしてもいいと思うんだけど。」

そっというのは弥生さん。

その腕にはしごかれた要君の姿があります。

「いや、赤井さん…もとい師匠が言うんだから断固として明かしち
やいけないんだ。」

睦月君は冷静に突っ込みます。

どこまで崇拜してるんですか、あの腹黒な口りさんを…

そんなこんなで、次続きます！

第十一話（後書き）

はい、gdgdで申し訳ない！
スランプなので＜＞

感想とか、待ってます＜＞

第十二話（前書き）

頑張ってきますっ！

あ、活動報告にちょっと大事なことが書かれているので見てくださ
い。

第十二話

「っというか睦月、何もそこまで敏感になることあ…」

「アホか要は！」

師匠が僕のことを信じてくださったんだぞ！」

「…まあ、最初は赤井さんと気がついてはいませんでしたけど。」

熱くなる睦月君に、冷やかな視線で答えるのは水無月さん。
そこに言葉を返せないのが睦月くん。

そうなんです。

実は彼、最初に会った時はりんごさんだと気がつかなかったんですよ。

涼子さんが最初に叫んだとき、同姓同名と間違えていたんですね…

その時の様子を、ちょっと見てみましょう。

「えっと…」

今回の依頼主の、赤井りんごさんで間違いないですか…？」

「もちろんですよ」

「にしてもりんご、お前昔となんも格好が変わってないんだな。」

「当たり前ですのっ！」

これが私の普段着ですのっ！」

「お前、年齢とか考えろよ…。」

一応涼子さんとりんごさんは、25歳つという設定です。
言い忘れていたので補足しておきましょう。

「私の服のコンセプトは、年齢云々の前には立ちはだかりませんの
！」

「ダメだろそんなの！
オレだってこの格好に変わったんだから！」

ここでまた補足しておきますが、今の涼子さんの恰好は黒い柄のつ
いたTシャツの上に白いパーカーをはおるような格好で、下は普通
のジーパンとなっています。

素晴らしい脚は、亮士君のみの特権つてことだそうです。

つというか補足してばかりですね、申し訳ないです。

「そんなの知りませんの！」

対してりんごさんの服装はというと、昔とほとんど変わらないゴス
ロリ衣装。

見ていて痛々しいです、本当に――

「うるさいですのっ！！」

…だから地の文に突っ込まないでって言うてるじゃないですか。

他の皆さんにもひかれますよ？あなたの態勢、危つくなっちゃいますよ？

「えっと…」

すっかり話についていけない睦月君。

そして今、絶賛困惑している模様ですね。睦月君の心の中でも覗いてみましょう。

（あれ…？

赤井りんごって、僕の一番尊敬している御伽銀行のメンバーだよな…先生と同じ年って言うし、涼子さんと同じ年ともいつてるし…

この人？でも先生が言うには、すごい派手な格好をしているっていうし…

でもこの人、かなり派手な格好…

うーん…でも背は僕くらいだし…）

そうなんです。

りんごさん、昔より若干だけ背が大きくなったんですよ。151センチまで大きくなったそうですよ。

その昔との若干の誤差が、睦月君を混乱に貶めているようです。

「…なあ。」

「は、はい！」

その様子を見た涼子さん、心配になったのかどうかはわかりませんが睦月君に話しかけます。

「お前、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です！」

ここで、涼子さんの心の中ものぞいてみましょう。

（こいつ、まさかりんこのことが分かってないのか…？

まああいつ、昔と比べて少し身長伸びたし…

でも、語尾の感じは変わってないからな、亮士がちゃんと教えてないのかな…

あつ。そう言えば亮士が、りんごをすごく尊敬してる人がいるって言うってたけど…

まさかこの子なのかな？それじゃあ助けなくちゃ！）

…かわいいです。

ほんとにかわいいです。

考え方が、ほんとに可愛くまるまっちゃいましたね。

…ま、それがまたいいんですけど。

「なありんご。」

「なんですの？」

「お前さ、オレらが現役だったころ、一番情報集めんの得意だったよな。」

「そうですのね…

情報は昔のあのロリ体系で男子は簡単にだませましたし、女子は関係さえ保てば何でも言うてくれますし。情報を集めるのは簡単でしたの。

あと、出てきた情報を整理するのはとても好きでしたの。その人のプロフィールとか書いてる気がして、すごく楽しかったですの。」

…相変わらず腹黒すぎます。

最後、可愛くまとめましたが言ってることは腹黒すぎます。

「…あつ！」

まさかあなたはあの…あの…」

その話を聞いた睦月君、すぐく目を輝かせ、言葉にならない声をあげています。

「ん？どうしたんですの？」

「あの…赤井りんごさんですか?!」

「…他にどの赤井りんごがいるんですの？」

「本物！本物の赤井りんごさんだ！」

りんごさんの手をものすごい勢いで握って、大喜びする睦月君。

その目はすごく輝いていて、バックに『キラキラ』っというような輝きが見えます。

ほんとに大喜びしてますね。

「…ふう。」

その様子を見た涼子さん、安堵のため息をもらしました。

ほんとにもう、お母さんみたいな人ですね。

「え？ええ？？」

対してりんごさんは言いますと、すっかり困惑している様子。

無理もないでしょう、突然輝かしい目で見つめられて手まで握られてるんですから。

驚きで声もあげられてません。

「ぼ、ぼ、僕…！！」

あなたのことを尊敬してるんですっ…！！」

「…ええ？！」

さらに驚くりんごさん。

仕方ないですから、頑張ってください^^

「し、師匠って呼ばせてください…！！」

「ええええええ！？」

「りんご、呼ばせてやれよ。」

「で、でも…」

「ウルウル・・・」

でしたっ！

睦月君の得意技である上目遣いです！

こんな目をされた日には誰もは向かうことができません！

「…わかりましたの。」

その目にイチコロだったりんごさん。

素晴らし威力です、りんごさんを見事にKOさせました。

「それじゃあ弟子の睦月君にしかこの話はしませんので、涼子ちゃんはやっと離れてほしいんですの。」

「で、弟子?!」

「私が師匠なら、あなたは弟子でしょう?」
「そんなの、世の常識ですの。」

「は、はい!」

はきはきとした声と、とてもかわいらしい表情で笑う睦月君。
その表情は…まぶしすぎます<>

「それがですね…」

そして、今に至るわけで。

「パーティー…か…」

「簡単そうで、難しい問題よね…」

「っというか弥生、要をしごいたばかりなのに大丈夫なの？」

「…結構しんどいわよ、これ。」

「ハハハ…」

次回は要君と弥生ちゃんの話っ！

第十二話（後書き）

えっと…

とりあえずg d g dですいません<>

これを見終えた人は活動報告の方に行ってください！
結構重要なことが書いてありますので。

第十三話（前書き）

みなさん、お久しぶりですっ！

覚えてますか？モロツコですよ？？

今回は勉強の合間を縫って頑張ります！

第十三話

そう、それは桜散る4月の下旬。
桜の枝にはうつすらと緑色の影が見え始めたころ。

「名前は？」

一人の少女は、一匹の鳥に話しかけていた。
その姿は太陽に照らされ、すごく輝いていた。

彼女の名前は桐ヶ谷弥生、この春に御伽学園の高等部一年になった女の子。

中等部からのエスカレーターで、友達も多い…と思いきや。

「私は弥生、あなたたちだけが友達なんだ…」

彼女には、友達はいない。

いや、「友達」と呼べる人がいないのだ。

もっとわかりやすく言えば、目立ちたぬように人の輪に入り組んでいるのだ。

すべてはそう、彼女の症状を発症させないため。

視線恐怖症

対人恐怖症

そんな彼女はいつも昼休みはこの木の上において鳥たちと戯れているのだ。

せめてもの息抜きに。

「ソラっていうの？可愛い名前だね♪」

彼女はにっこりと笑うと、その後たくさん来た鳥たちに囲まれた。

「ははっ、ソラは私と違って人気者なんだね♪」

その姿はやけに悲しそうで、寂しそうだっただ。

「要くうゝん！」

「私とお話ししよっ♪」

「何言ってるの！私とよ！！」

「ははは、みなさん落ち着いて。」

そんな彼女とは対照的に、すごく目立った男子がいた。

彼の名前は如月要。

人と話すのが苦手、っというが見る限りそんな姿はうかがえないほどの人気だ。

っというのも彼、少し前まではそうだったのだが本の親切心で女子の荷物を運んだのが事の発端。

その時に、女子にすぐもてはやされたかなんかで、今では女子にひっぱりだこな一年生である。

「みなさんとお相手はお任せください」
みなさんで一緒にお茶会などどうですか？」

「「「二人きりじゃないとだめよっ！」「」「」

「ははは、みなさん手厳しいなあ。」

ここにいる女子は全一年生女子の半分。

残り半分は、男子と交際しているらしいので要は独り者の女子が全員の要のところにいるのだ。

持てない男は、まあ…嫉妬してますね。木の裏辺りで。

「とりあえず、今日はこの辺にしておけませんか？
僕も昼食をとりたいですし…」

「「「それじゃあ私も一緒にします！」「」「」

「何言ってるの！私とよ！」

「違うわっ！要さんは私と一緒に食べるんだからっ！」

「私は一緒に食べたいです・・・」

「あんたらなんか知らないわよっ！とにかく要さんは私とたべるんですの！」

女子の争いが、こんな所で始まった。
一人の男のために。

「いまだ、逃げろっ!!」

すごい勢いと静かさで逃げた要。

あまりにもヒートアップした争いだったのか、要がいなくなったことに気がついたのは数十分後だったそうだ。

「…ふう。」

なんとか逃げ出した要は、近くにあった木にもたれかかって一のため息をついた。

ここはほとんど人が出入りしない、学校の真裏。

物音さえせず、聞こえる音は風に揺れる木々、それに合わせてさえずる、鳥の声だけ。

「やっぱり、あの人数はさすがに苦手だな…」

ちよつと青ざめている彼は少し吐きそうな思いを必死に止めていた。こんな所を誰かに見られたら、そう思ってたのこらしい。

「みんな、突然来すぎだつてのに——」

「…誰か、いるの？」

「えっ？」

突然声を掛けられ声の主を探し、彼はふと上を見上げた。

太陽が眩しくて見えなかった？
いや、鳥たちで見えなかった？
いや、違う。

「…気のせいかな。」

落ち着きを取り戻した彼女の笑顔が、眩しすぎたからだ。

「…きれい——」

要と弥生の出会いは、こんなところからスタートしたのだ。

第十三話（後書き）

はい、全然書いてないのでスランプですねわかります。
いやあ、書いてないと訛ります。

っということ、感想等ありましたらお願いしますっ！

第十四話（前書き）

大分空いちゃいましたが…
やりますっ！

第十四話

「えっと…」

話しかけようとしたが、要君はあることを思い出した。

——彼女は人に対してなにかしら恐怖心を抱いている——

他の人と少し距離を置いている所を遠目からみていた要君は、なにか弥生さんに何かあることをうすうすながら感じていたようだ。
…さすが要君というべきか。

「…やっぱり誰かいるの??」

しかしその上をいったのが弥生ちゃんの耳のよさ。

驚きと不安を抱えたような声で、声のする方向を見た。

まあ、動物の声が聞きとれるくらいですし、人の声を聞き取るなんてお手のものなんでしょうね。

そしてまあ、当然のごとく目があってしまつて——

「……………」

「……………」

妙で気まずい雰囲気が流れるわけ…

「えっと…」

「すみませんっ！」

あつ、要君が一瞬で謝りました。

「ええ?!」

「突然俺なんか話して、ごめんなさい！」

土下座しちゃいましたよ、いつもの彼じゃあり得ない光景ですよ。でもまあ、人みしりの域を超えている弥生ちゃんに突然話しかけた要君にも若干引け目を感じるものがあっただけでしょう。

しばらくの沈黙の後、弥生ちゃんが木から下りて、要君の前に立った。

その表情はとても柔らかかとしていて、優しい表情で。

「…顔、あげてください。」

その声に、要君はそつと顔をあげた。

その表情はいかにも不安そうで、いつ殴られてもかまわんという表情。

しかしその表情とは裏腹に、弥生ちゃんは優しい表情を崩さないまま。

「大丈夫ですよ。

気にしないでください。」

につこり笑ったその顔が、要君にはまぶしくて。

そして、魅かれる理由には十分な表情で。

「あのっ！」

「はい？」

「僕と、お付き合いしてもらえないでしょうか……！」

「え？」

「ご迷惑じゃなかったら、お付き合いしてもらえないですか？！
ほんとに、ダメならいいんです！
今、一目見た瞬間に好きだったんです！」

「ええ？！」

「ほんとに、ほんとに迷惑でなかったらでいいんです！
お願い……しますっ……！！！」

今までの要君じゃほんとにあり得ないですね。
あっていきなり告白するって……
前までされる側だったのに――

そして弥生ちゃんの反応は――

「えっと…」

まあ…困惑は当たり前ですよ。

会っていきなり告白って…どこのギャルゲーですか、全く。

「こんな…こんな私でいいのであれば——」

しかも承諾しちゃいましたよっ！

まあ要君ともなろう方に告白されたら、そうもなりますよね。

「でも。」

「ハイ？」

「一つ、条件があります。」

「なんででしょうか。」

「私以外の女の子に、でれでれとだけはしないでください。

私、それで一度人に裏切られているので。」

「わかりましたっ！

そんなことがあったら、僕のことをどうにでもしてくださいっ！」

「…なら、よかった——」

~~~~~

「昔はあんなに素直だったはずなんだけどなあ……」

「昔の余韻に浸っちゃだめだよ。」

「要はあれでも丸くなっただんだよ？」

「でも睦月、私結構我慢してない？」

「いやあ、もう仕方ないって。」

「戻って現代……もとい今。」

睦月君と弥生さんは今の要君を見て、何か感傷に浸っています。  
まあ、今の要君は――

「お嬢さん、一緒にお茶でもいかが？」

「そこのお嬢さんも一緒にどうですか？」

「睦月。」

「…ん？」

「もう一発、やってきおk？」

「…許そう。」

こうして要君はもう一発しごかれたとさ。  
まあ、彼が悪いんですけどね。

## 第十四話（後書き）

いやあ、スランプって怖いなあ…

感想、待ってます!!!!!!

## 第十五話（前書き）

みなさん、お久しぶりです＞＜

ようやくなにか浮かんでまいりました＞＜

相も変わらない駄文で今年度も頑張っ て行きますので、よろしくお  
願いします＞＜

## 第十五話

ここは御伽学園相互扶助協会、通称御伽銀行。  
その地下部である。

「えっと…」

赤井さんの依頼内容を整理しようか、一応。」

「そうね、要をしごきすぎたから忘れちゃった…」

「お、俺はもうなんでもいいです…役立てることあるなら…もうマジで…」

提案したのは睦月君、賛同したのが弥生ちゃん、生気を失っているのは要君。

生気を失っている理由は、前回の話で何となく理解してください。

「とりあえず僕らがやるべきものは、パーティーの開催ってことだよね？」

「ええ、そうなるわ。」

「会場の場所の指定、時間の指定は特になくて、予算は100万…?！」

驚きです。

まさかりんごさん、そんな太っ腹に出してくるとは…  
この数年で何があったのでしょうか…

「あつ、それは学園長が出しているらしいですよ。」

なるほどね、だからそんな高いんですか…

というかりんごさん、どんな話術…つか誘惑をしたんですか…  
いつものあれですか？「おじいちゃま、りんご今度パーティー開きたいんですの〜」とかですか？！

え〜…ゴホン。

すみません、少し取り乱しました。

「確か人数は…」

「森野先生の代の御伽銀行メンバー9人だね。」

「なのに100万とか…意味わかんねえな…」

まあ、その分色んなことあった代ですしね。  
そのくらいねぎらわれて同然でしょう。

「とりあえず、会場はどうでしょうか…」

「ん〜…できれば御伽花市内がいいって言ってたし…」

あの市内の規模ならありそうですね、そんな場所。

「…なあ睦月。」

「なんだい要。」

「会場さ…ここでもくね？」

「「は？」」

おっと、あまりの発言に思わずハモっててしまう睦月君と弥生ちゃん。

まあびっくりですよ、あの要君がそんな発言するんですから。多分お二方の中で「女の子がたくさんいるところっ！」とか言うかと思っっていたんでしょう。

「要がそんなこと言うなんて…」

僕、せっかく突っ込む内容まで決めてたのに…」

なんと、睦月君は内容まで考えていたなんて…  
そこまでしていたら驚くのも無理ないでしょうね。

「俺だつてたまには普通の意見も述べるわっ！」

「一応聞くわ要。なんでそう思っただの？」

そりや気になりますよね、当たり前前の質問です。

「いやさ。」

先生は仕事場だから来てるようなもんだけど、他の8名…涼子さんはついさつき来たけども…

残りの7名は全然来てないわけだろ？

だから変なところで行くよりもこの地下本店を使ってやった方が懐かしめるし、いいかなって思っただけ。」

「…あの要がマジレスを…！」

「待て待て！」

俺がそんなこと言うキャラじゃない！みたいな表情をしないでくれよっ！」

「要…あなたとかなり長い間付き合ってきたけど、こんな発言したところ、見たことないわ…」

「待ってくれよ！俺、結構言ってたぜ?!」

忘れ去られるほど普段の行いが悪かったんでしよう。

要君の普段の行いに問題があったってことで、この話は終わりにしましょうよ。

「じ、地の文にまでそう思われているなんて…」

「どうした？要。」

「いや睦月、俺はナレーターにも変な勘違いをされていてちょっと落ち込んでいるだけだ…」

「?とりあえず話を続けようか…」

そう言ってまたワイワイと始まった3人の会議。  
その詳細を知る者は…あの3人だけ?

次回は、日にち飛ばしてパーティー当日

## 第十五話（後書き）

あれ…？

前よりもかなりひどくなってない？

・・・すみません、マジですみません…><

こんなモロツコですが、今年度もよろしく願います><

## 第十六話（前書き）

なんか気分が乗っているので更新↑

なんだろう、ある種の現実逃避だね、うん。

ってことでね、よろしくお願いいたします！

## 第十六話

「なあ、亮士…」

「ん？」

「あいつらに任せといて…大丈夫だったのかな…」

「ん…わからん。」

時は結構経ち、パーティー当日。

亮士君たちは1年生3人からもらった招待状に書かれたところへ来ていた。

…とはいっても御伽銀行の地上支店、あのプレハブ小屋の前である。

「びつくりゲストもいます、お楽しみに…って…」

「あいつらは何を考えてやったのか、俺でもわかんないさ。とりあえず、主催はあっちだからな。」

「うん…」

「心配するな、俺たちは一応客側なんだから。」

裏方とかは、全部あっちに任せればいい。な？」

「わ、わかった…」

「にしても…大神君？」

「今は森野だけど…なんだ頭取。」

「その恰好は…反則じゃないかな？」

「なっ！／＼／／」

「確かにそうですの」

今の涼子ちゃんの格好…昔じゃ絶対あり得ませんの」

「う、うるせえ！／＼／／／」

「可愛いだろ？」

いつもも可愛いが、この格好になると可愛さ倍増だ。」

「り、亮士までっ！！」

そうなんです。今の涼子さん、昔じゃ絶対にあり得ない恰好をしているんです。

「い、いいだろ！

あたしがドレス着たってよっ！！」

…もちろん調達はりんごさんです。

亮士君がこっそりりんごさんに話をして、りんごさんがサイズを寸分違わず取り揃えたとか。

ちなみに色は白、真っ白なドレスなんです。

…さすがりんごさん、そう言う行動力は尊敬に値するんですけど、内容がっ！内容がっ！！

「これだって…亮士が着ろっというから……」

「ああ、すごく似合っているよ。」

そんな亮士君もタキシードなんですけど。

いやあ、真っ白なドレスの涼子さんにタキシード姿の亮士君、どこの結婚式ですね、はい。

「り、り、亮士だって…」

「似合ってるか？」

「う、うん・・・／＼／＼／」

見つめあう二人、このままだとキスくらいはいつてしまいそうな…

「そうは問屋が卸しませんの。」

「そうです、今からパーティーですよ？」

「2人だけでやってくれるかな？」

「2人の中では始まってるっばいヨー。」

「まだ涼子様の中では恩返しが終わってないんですね」

「全く、俺たちを超えたんじゃないか？」

「そんなことないと思いますよ？太郎様」

まあそりゃ、ある種のお約束ですよ、とめますよね  
私個人としてはそのまま行ってもよかった…

『問屋が卸さないのっ！！』

…さーせん。

とまあ、そんな私個人の問題はひとまず置いておくとして。  
久々に顔を合わせた9人。

笑ったり驚いたり、にやついたり…

「最後のはあたしにだけだろ！」

とりあえず、九者九様の反応を示していた。

「とりあえずまあ。」

「中に、入ろっぜ。」

「そっですのね」

「久々ですね、ここに入るのも。」

「そうなるね？」

「研究室どうなってるか楽しみヨー。」

「中はきれいになっているかしら？」

「楽しみだね、乙姫？」

「はい！太郎様！！」

亮士君を筆頭に、御伽銀行地上支店のプレハブ小屋の扉に手をかけた――

## 第十六話（後書き）

なんか微妙に長くなっ たなあ W  
まあ、会話多いしね W

感想とか、お待ちしています！

## 第十七話（前書き）

大変お久しぶりです><

森野ですっ

長らく待たせたのにこのクオリティーで申し訳ないです><

ごゆっくり御鑑賞下さいませっ

## 第十七話

「いらっしゃいませ！」

亮士くんがプレハブ小屋の扉を開くと、元気よく迎えてくれたのは睦月君。

「いやあ、素晴らしい笑顔ですね。百点満点ですよ。」

その裏の思考に関しては知る由もありませんが。

「おお、睦月か。」

「お、おまつ…その格好……」

普通の反応をする亮士君に、びっくり目が点な涼子さん。  
まあ、驚くのも無理ないでしょうね。  
だって――

「睦月君、それ私の昔の格好ですよ。」

そうなんです。

睦月君、まさかの昔のりんごさんのあのゴスロリ衣装を身に纏っていたのです。

「おまつ、その格好……！」

驚きを隠せない涼子さん。目が点とはこのことでしょうかね。

「これですか？皆さんにあの頃を思い出していただくこと、ちょっと着てみたのですが…」

さも当たり前のように言う睦月君。

ああ、なにかと似てますものね、りんごさんと睦月君は。

「さて睦月。」

「はい？なんですか、先生。」

「おまえ、その衣装やらなんやらはどうした？」

「理事長に言ったら喜んで教えていただきました。」

そういう魂胆でしたか。

まあ、そうともなれば納得してしまう皆さん。

「やはりな…」と亮士君。

「あいつか…」と涼子さん。

「それなら納得ですの。」とりんごさん。

「あの人なら…」と浦島さん。

「全くですね…」と乙姫さん。

「あの人らしいですね。」とおつつさん。

「教えるとはさすがヨー」と魔女さん。

「少しは私達の身にもなってくださいよ…」とアリスさん。

「まあ、理事長だしね？」と頭取。

「皆さんの昔の服もご用意していますので、こちらにどうぞ。」

何食わぬ顔でクローゼットの中から昔の改造制服が出てきたではありませんか！

ちなみに皆さんの改造制服は各自保存していますよ？

「……一応聞きたい。」

さすがに違和感を覚えた亮土君。

御伽銀行の代表として、一応拳手。

「どうかしましたか？」

睦月君、頭にハテナマークを浮かべています。

「その服、どうやって仕入れたんだ？」

「・・・・・・・・。」

睦月君、沈黙ですよ。

言いたくないのか、はたまたわからないのか…

「言ってくれ。特にこれといった意味はないんだ」

おやおや、涼子さんまで気になるようで必死の頼み込みです。  
目までうるうるさせちゃって……男だったらイチコロ……って睦月君  
は男の子でしたね。

「……………／／／／」

この攻撃にはさすがの睦月君もだんまりです。  
若干上目使いなところ、確信犯なのかそれとも自然なのかわからない  
ところが、策士ですねえ。

「……………理事長です」

必死の頼み込みからなのか、はたまた涼子さんのこの表情を見たい  
がためなのか、散々もったいぶっていた睦月君はとうとう口に出し  
ました。

そして、元役員の反応はというと――

『・・・・・・・・・・。』

まあ、だんまりですよね。

一部は「やっぱり……」みたいな反応ですし。

「と、とりあえずどうぞこちらへ!」

気を取り直した睦月君、そそくさとご案内する様子。

案内される側の皆さんは、半ばあきれ顔で睦月君の後に続きます。

こんな出だしで、果たして大丈夫なのか……？

## 第十七話（後書き）

いかがでしたでしょうか＞＜  
感想の程、よろしくお願いします＞＜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3485o/>

---

団欒の中で

2011年10月10日03時29分発行